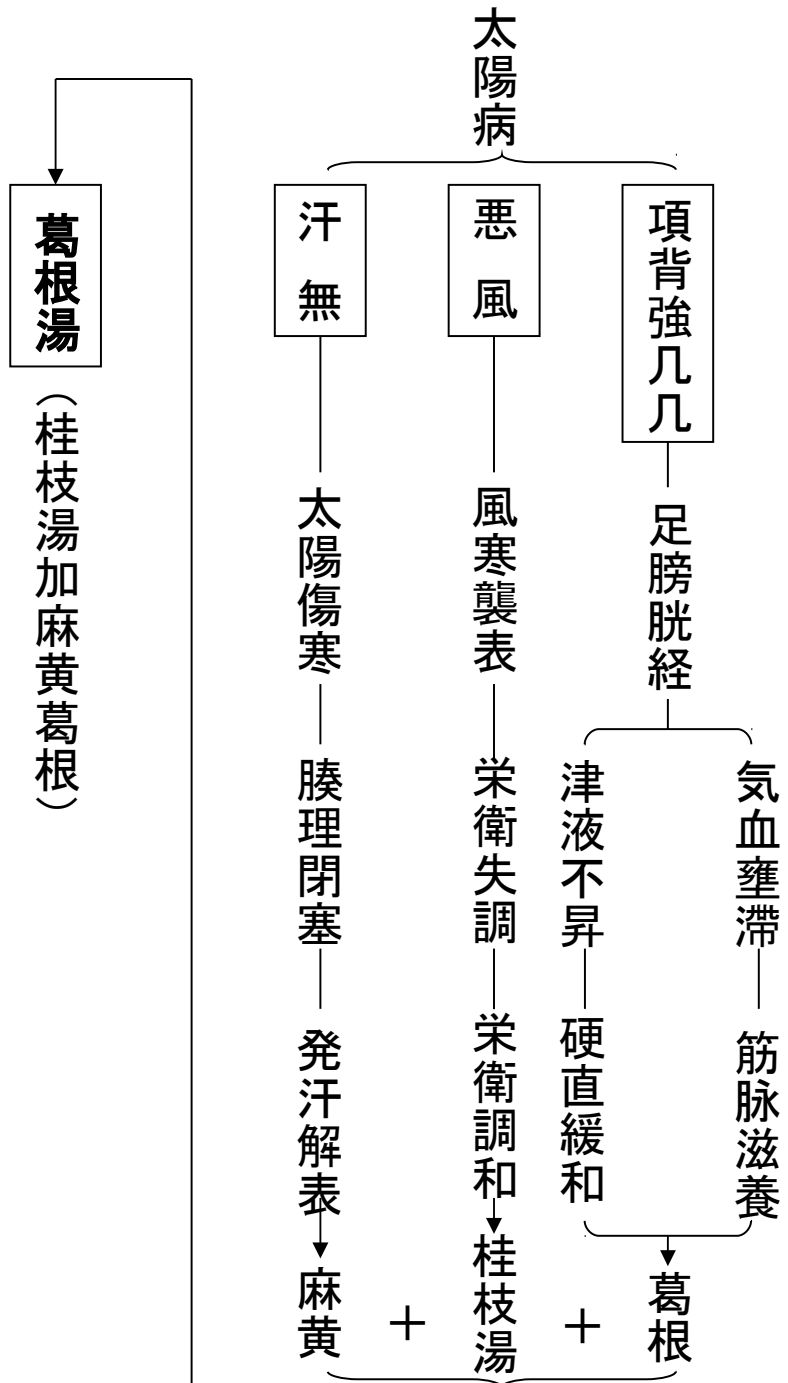


并太陽病脈証并治 中

第三十一条 太陽病、項背強几几、無汗、惡風、葛根湯主之。



葛根湯の証 *

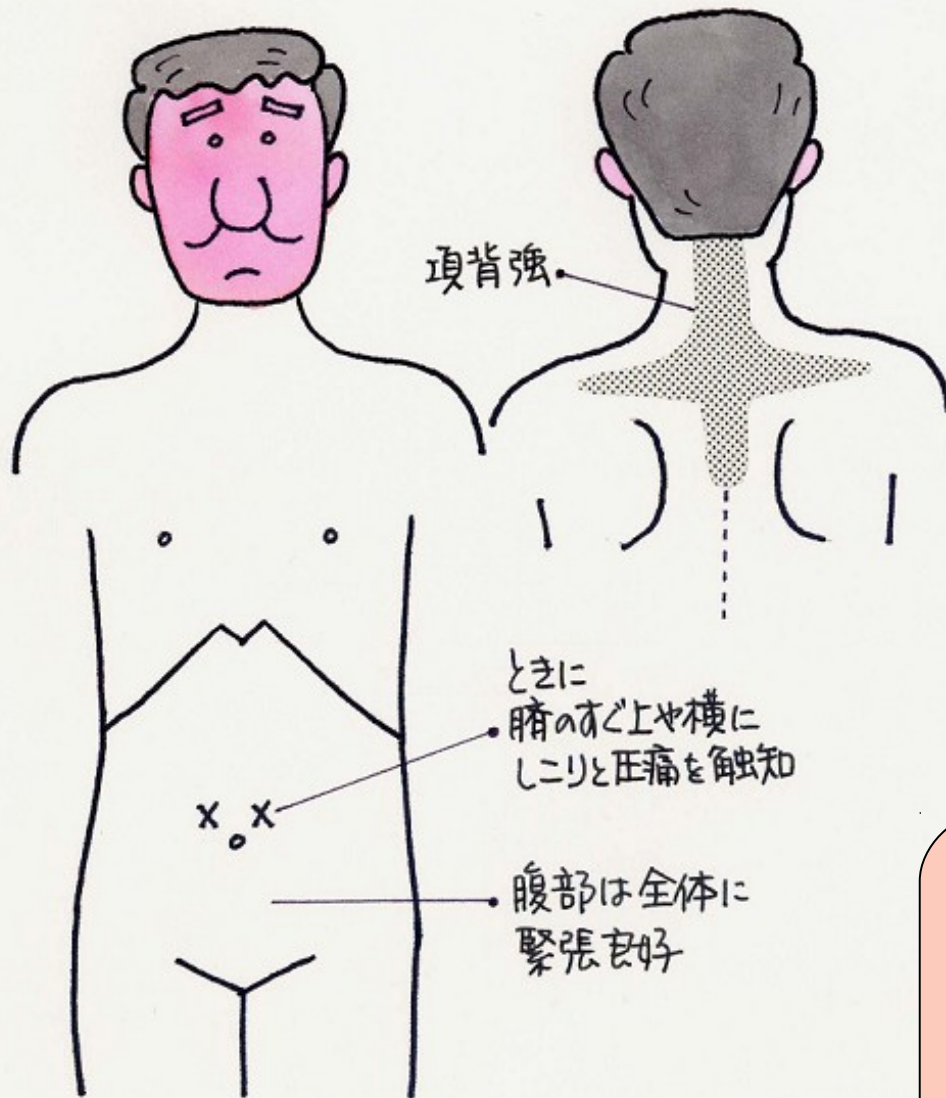
方意

太陽傷寒の中で、特に足太陽膀胱経脈の経気の流通が阻滞され、気血の流れが滞ると共に膀胱からの津液が太陽経を上昇しなくなったため太陽傷寒の症状に加えて項背部が特に強ばり痛むものである。

本方はまた太陽病と陽明病の合病で下痢する者を治す。

弁証のTrias

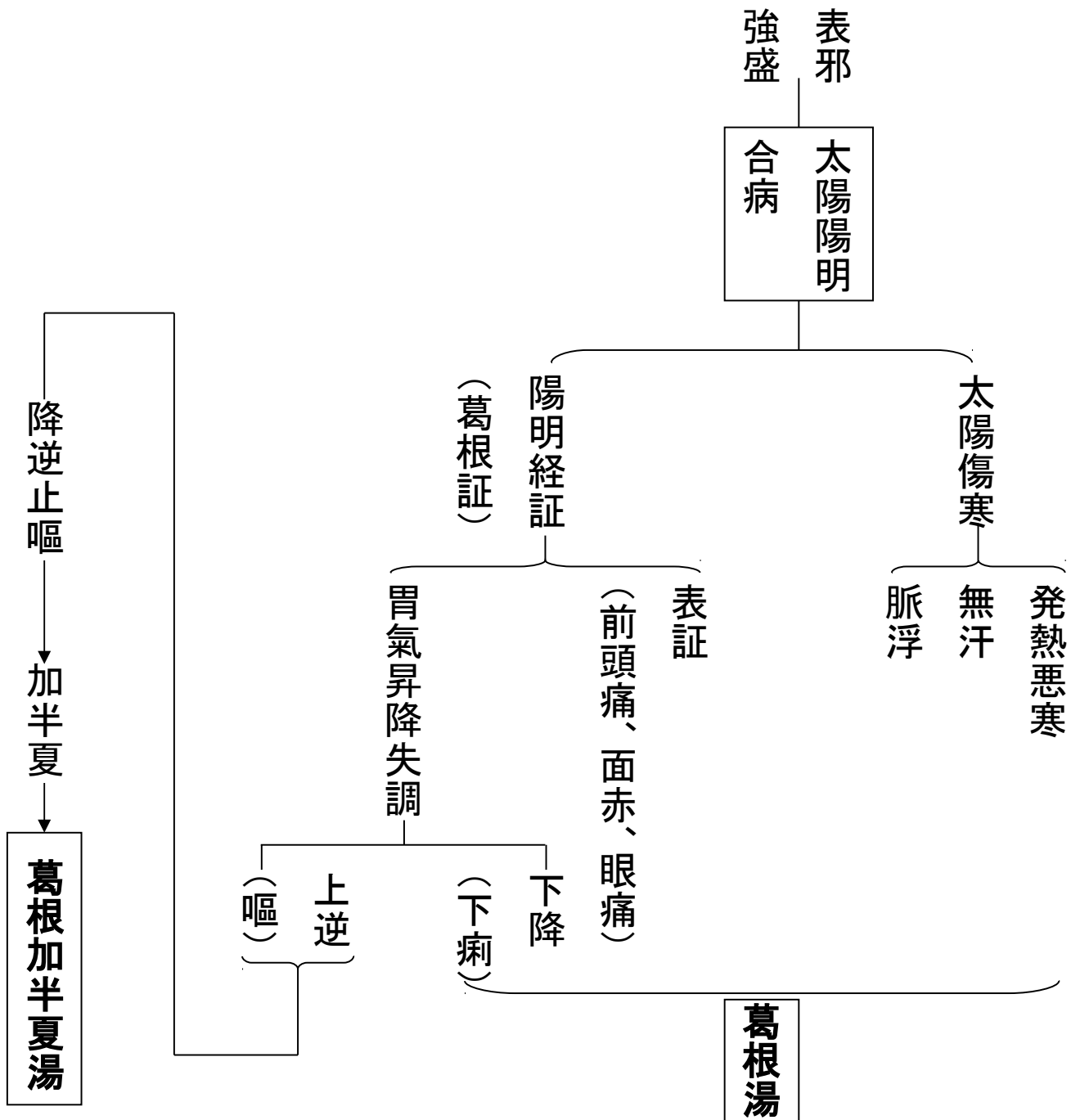
- 1) ふうふうのカゼ
- 2) 項背強痛、時に胃腸症状
- 3) 脈は浮実、汗は無い



第三十二条 太陽陽明合病者、必自下痢、葛根湯主之。

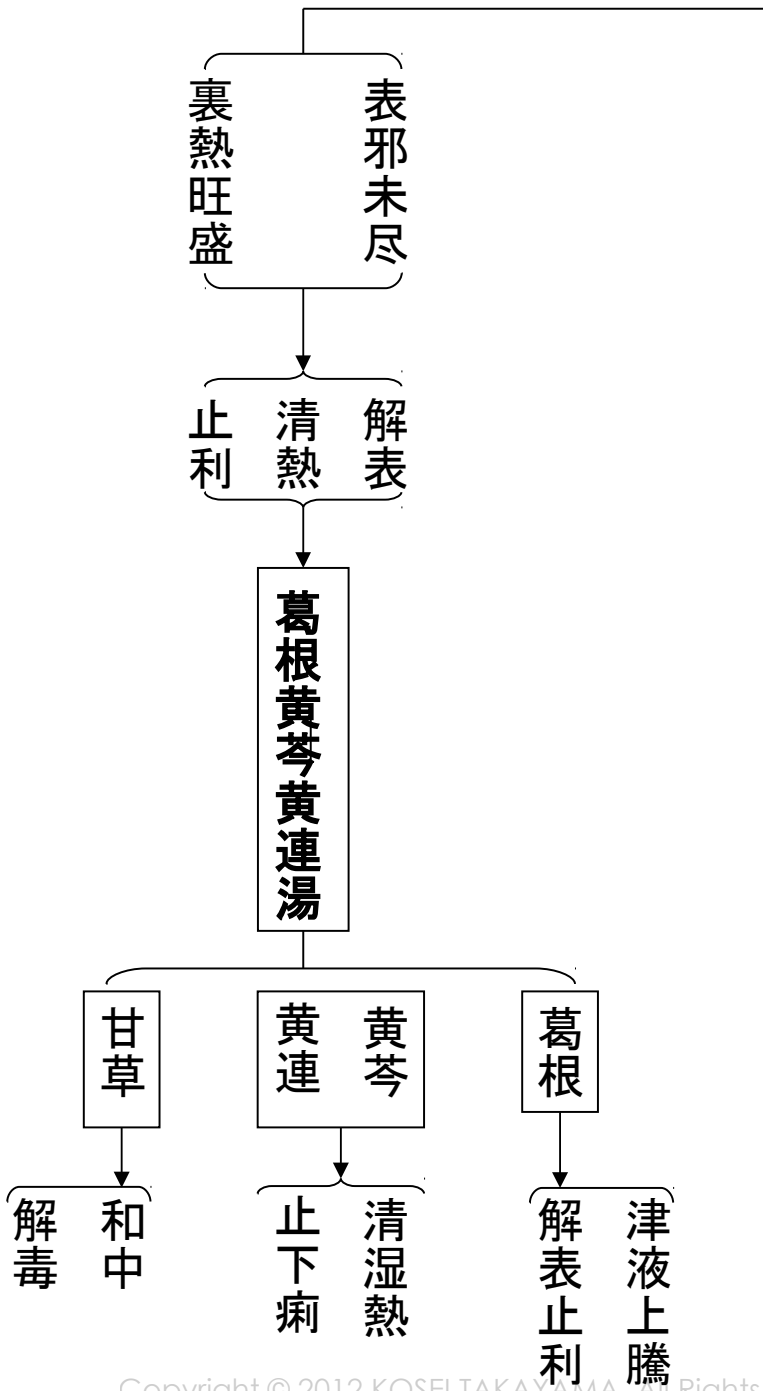
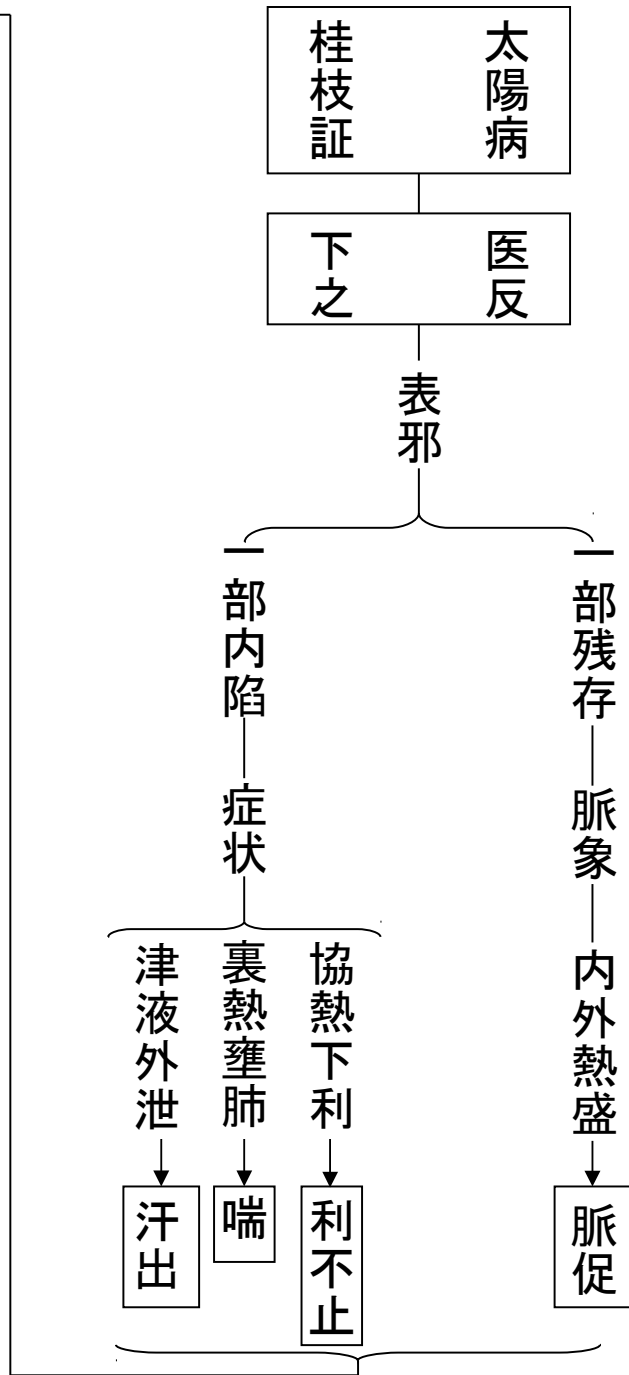
第三十三条 太陽与陽明合病、不下利、但嘔者、葛根加半夏湯

主之。

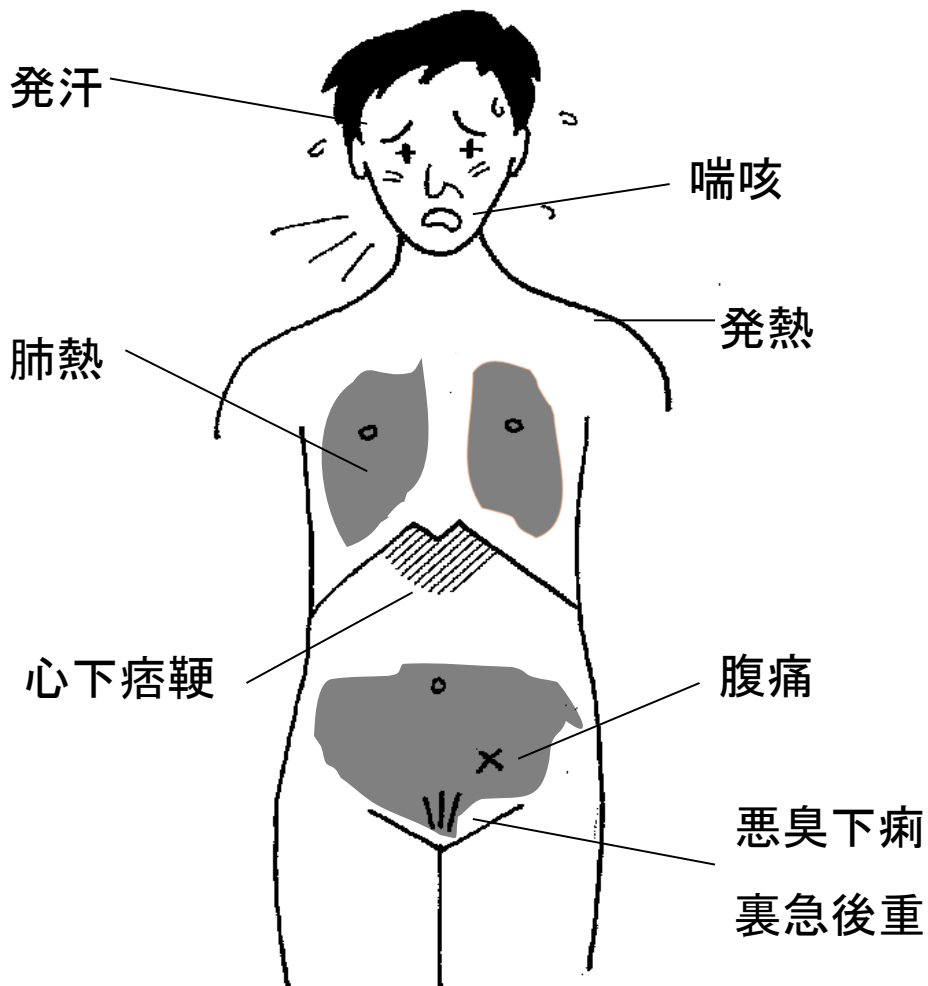


第三十四条 太陽病、桂枝証、医反下之、利遂不止、脈即者、
 表

未解也。喘而汗出者、葛根黄芩黄連湯主之。



葛根黄芩黄连湯の証 *



方意

太陽中風証を誤下した結果、病邪は一部表に残存すると共に一部は裏の陽明に内陷し、表裏俱に熱盛となり、発熱と実熱性の協熱下利、更に裏熱が肺に上薫して喘咳を生じ、また津液が熱で外泄されて多量に発汗する。口渇があり、舌は紅色で乾燥、黄苔。脈は促(数脈)である。

処方構成

葛根半斤(6.0)陽明の表を治す。黄連3両(3.0)清熱解毒。

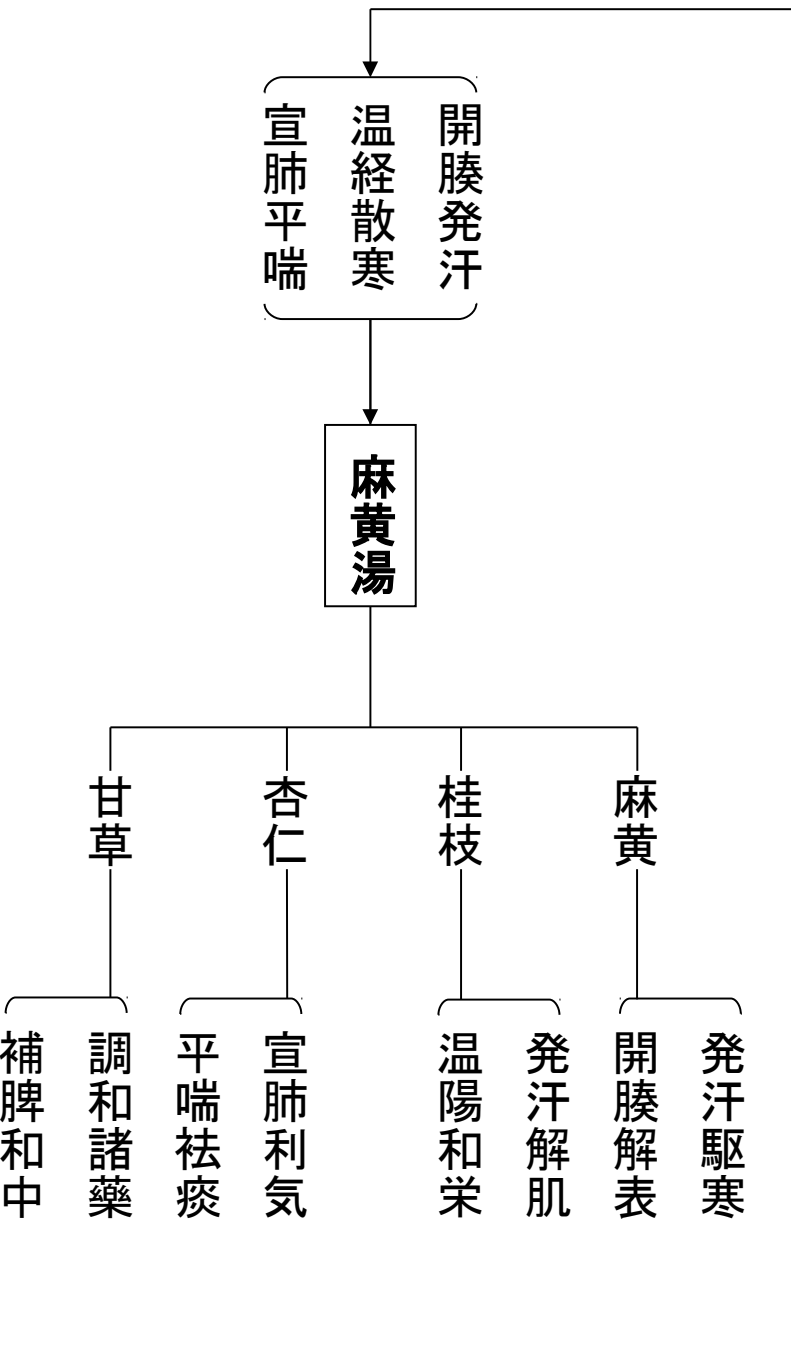
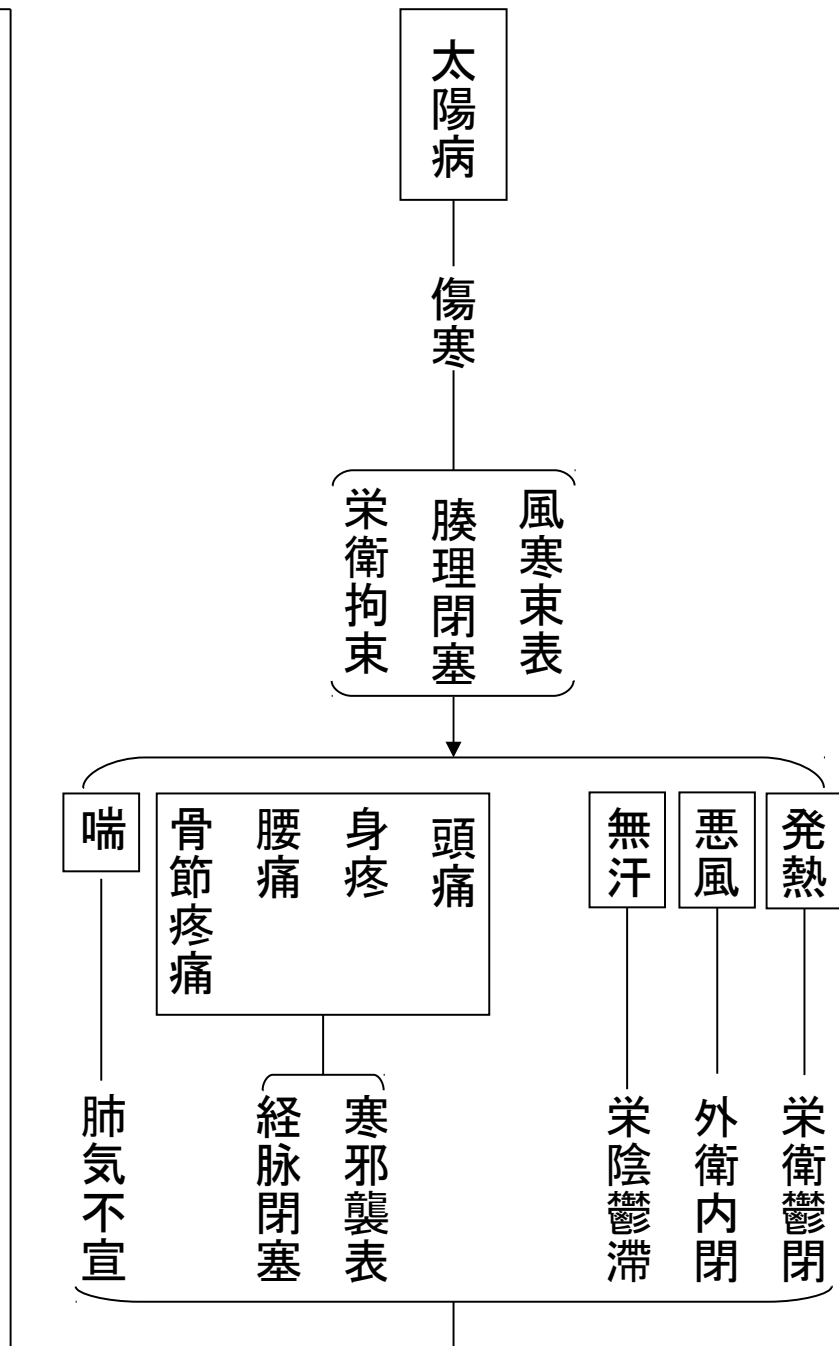
黄芩3両(3.0)肺熱と腸熱を瀉す。甘草2両(2.0)中焦を緩す。

弁証のTrias

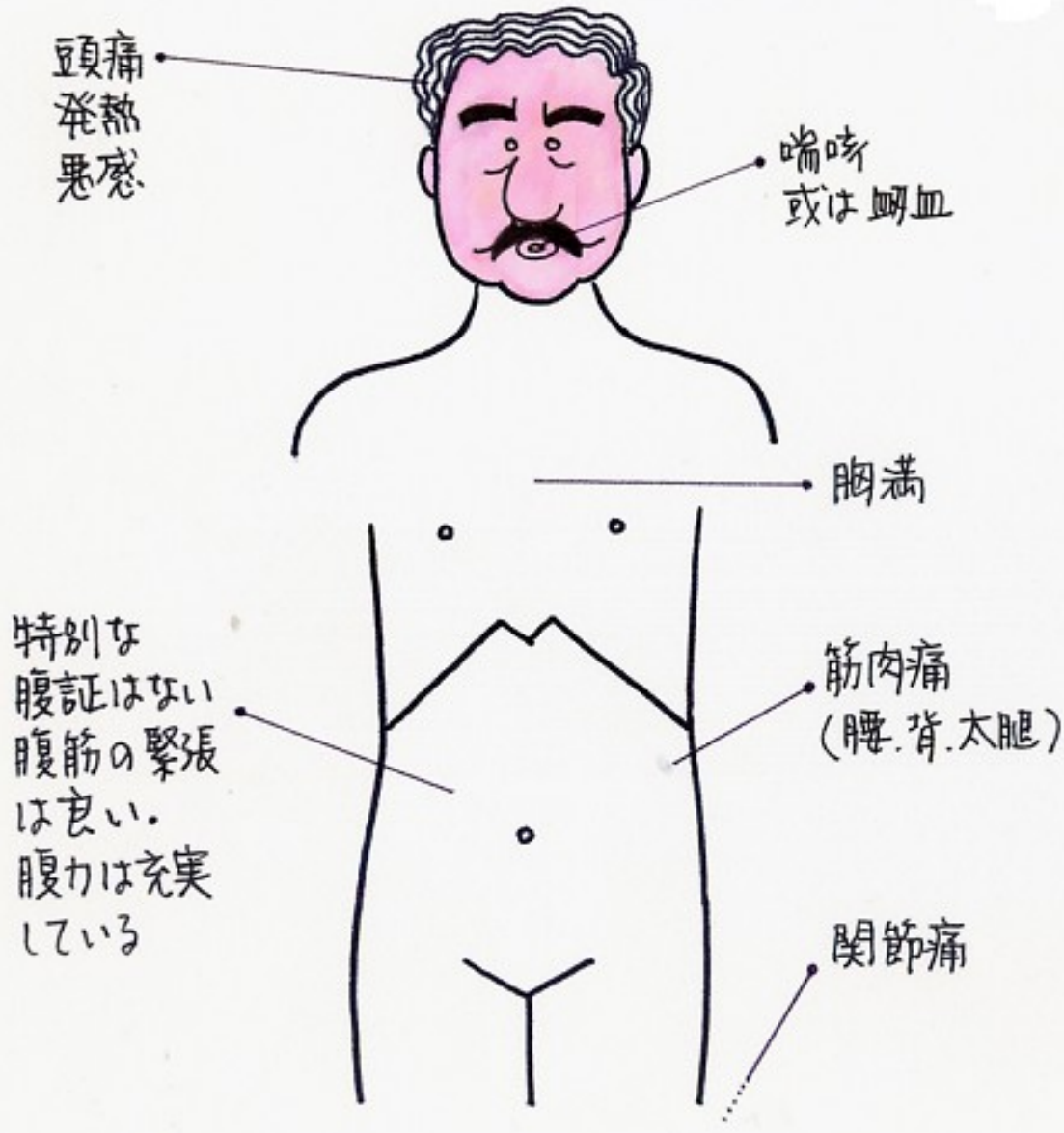
- 1)発熱、発汗
- 2)熱盛下痢、腹痛
- 3)時に喘咳

第三十五条 太陽病、頭痛、發熱、身疼、腰痛、骨節疼痛、惡風、

無汗而喘者、麻黃湯主之。



麻黄湯の証 *



方意

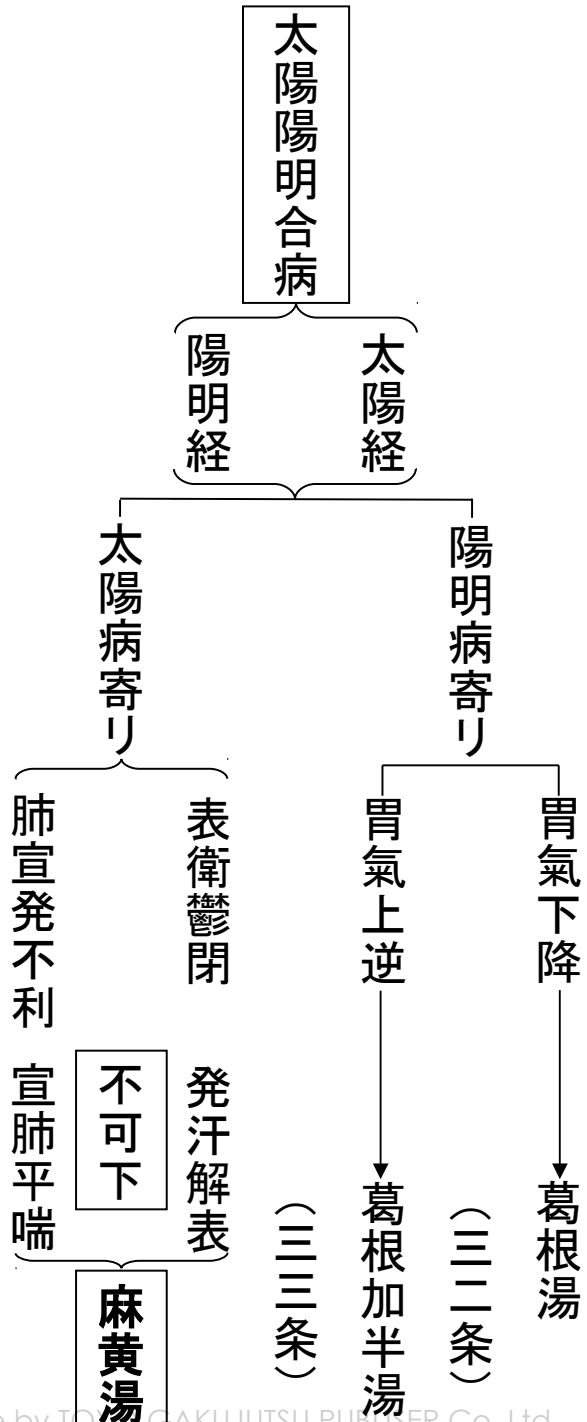
太陽病傷寒の主方。

寒邪が太陽経脈を侵し、体表の腠理を閉塞させ、榮衛が拘束される結果、太陽病の一般症状に加えて、発熱、悪風、無汗、身疼、頭痛、骨節疼痛、喘の麻黄八証といわれる症状を呈す。

弁証のTrias

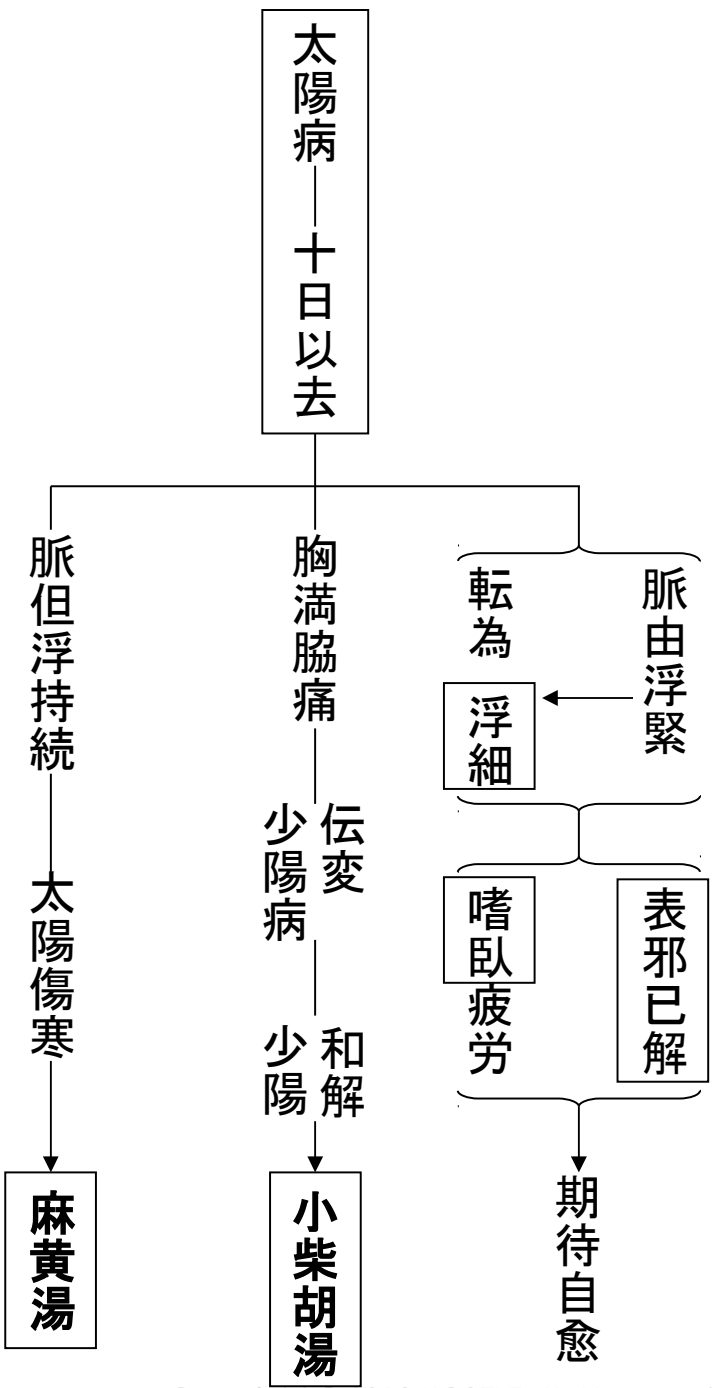
- 1) 強い発熱悪寒
- 2) 筋肉痛や関節痛
- 3) 咳、痰が顕著

第三十六条 太陽與陽明合病、喘而胸滿者、不可下、宜麻黃湯。



第三十七条 太陽病、十日以去、脈浮細而嗜臥者、外已解也。

設胸滿脇痛者、與小柴胡湯。脈但浮者、與麻黃湯。

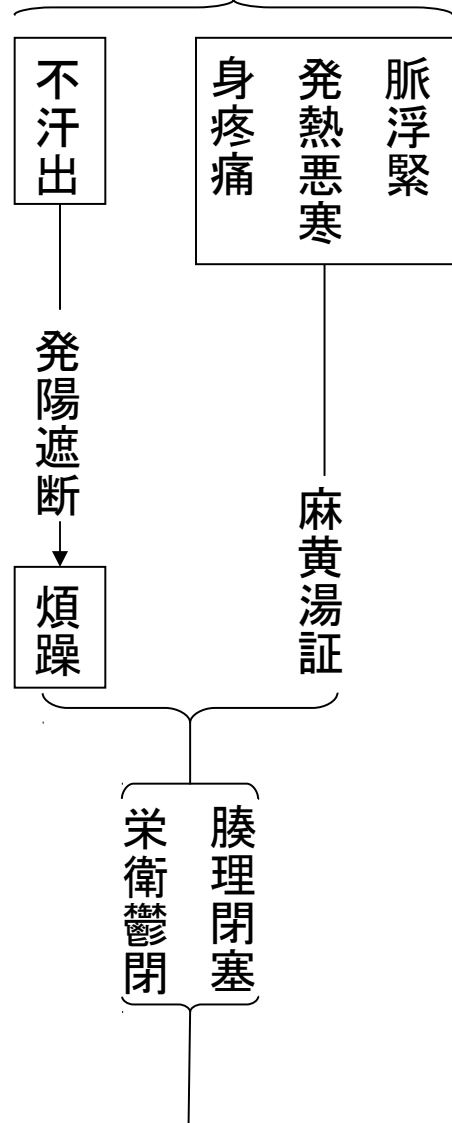


第三十八条 太陽中風、脈浮緊、發熱、惡寒、身疼痛、不汗出而

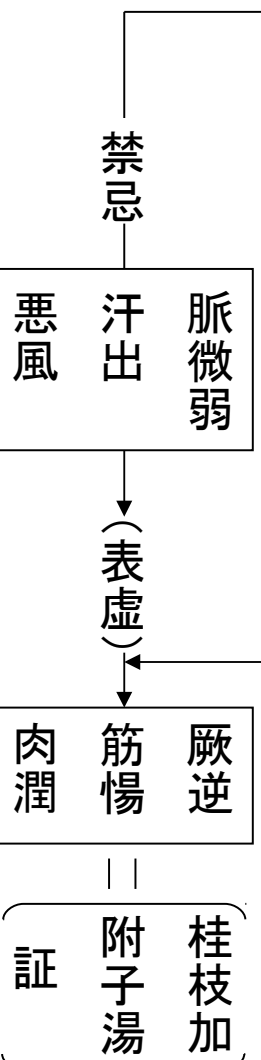
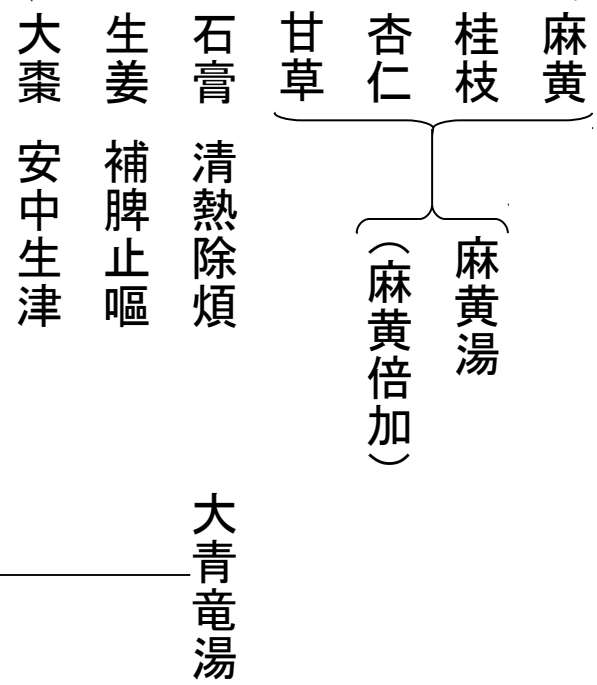
煩躁者、大青竜湯主之。

若脈微弱、汗出惡風者、不可服之。服之則厥逆、筋惕肉潤、此為逆也。

太陽(傷寒)



大青竜湯



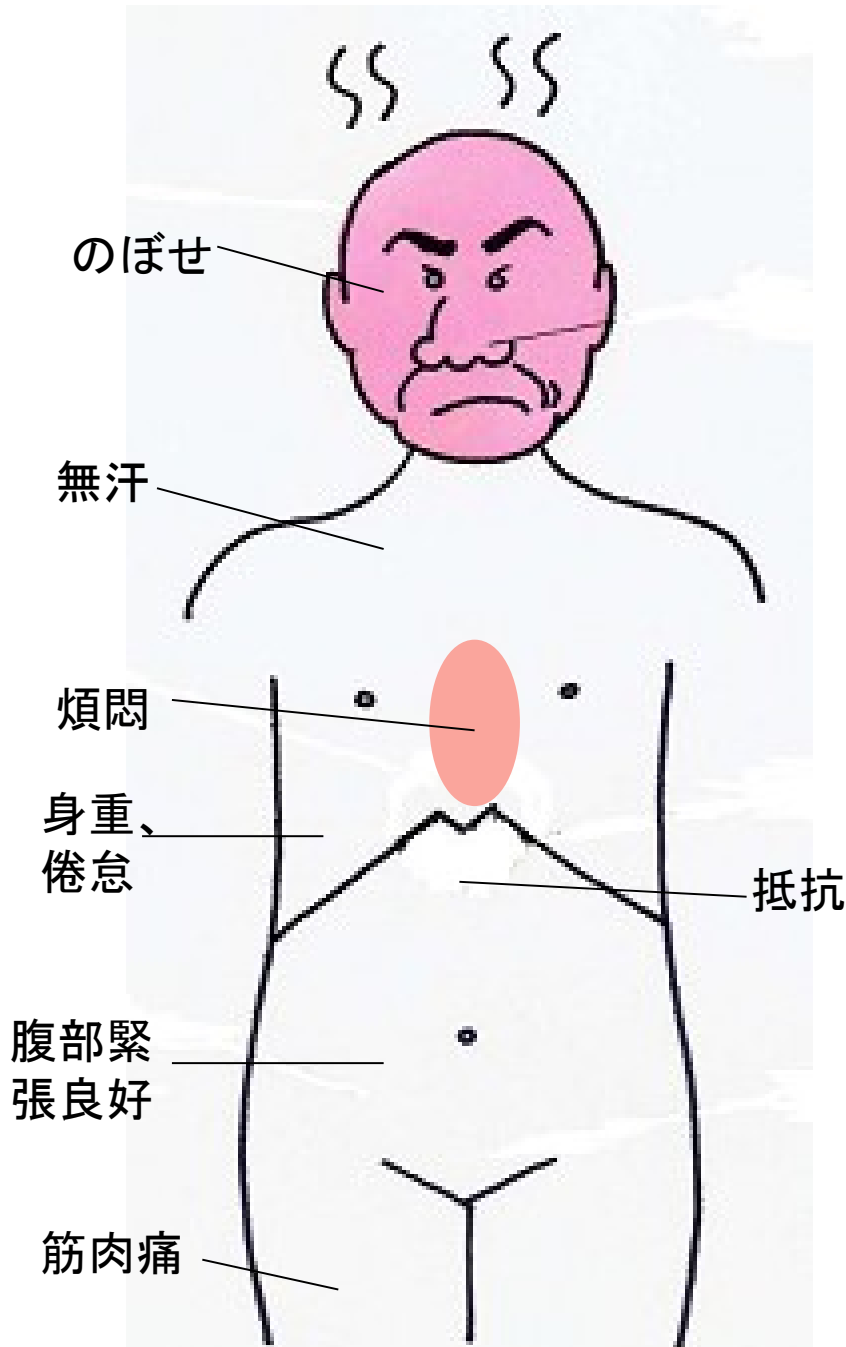
大青竜湯の証 *

方意

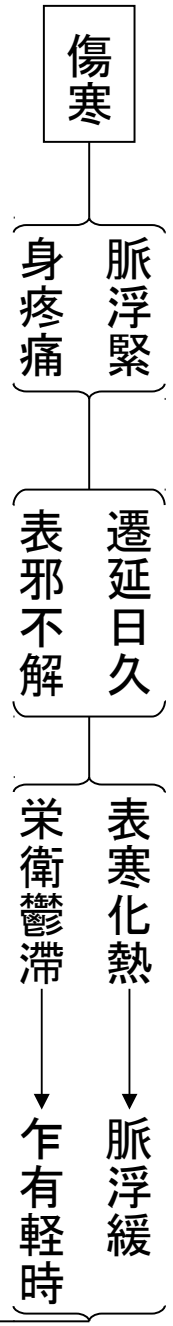
麻黄湯に石膏、大棗、生姜を加えた加味方。
太陽傷寒で麻黄湯を投与すべき時に誤って桂枝湯を与えると、発汗させることが出来ない
ので、表の衛陽は肌内に閉じ込められた
俛で発散できず、湿熱となって裏に鬱滞し、
鬱熱が心に迫り煩躁を生じるものである。
本方は強い発汗・清熱・利水作用を有す。
発汗解表と共に裏の鬱熱を清し湿を祛る。

弁証のTrias

- 1) 発熱悪寒、無汗
- 2) 煩躁、体が重倦い
- 3) 脈は浮緊



第三十九条 傷寒、脈浮緩、身不疼、但重、乍有輕時、無少陰証者、大青竜湯發之。

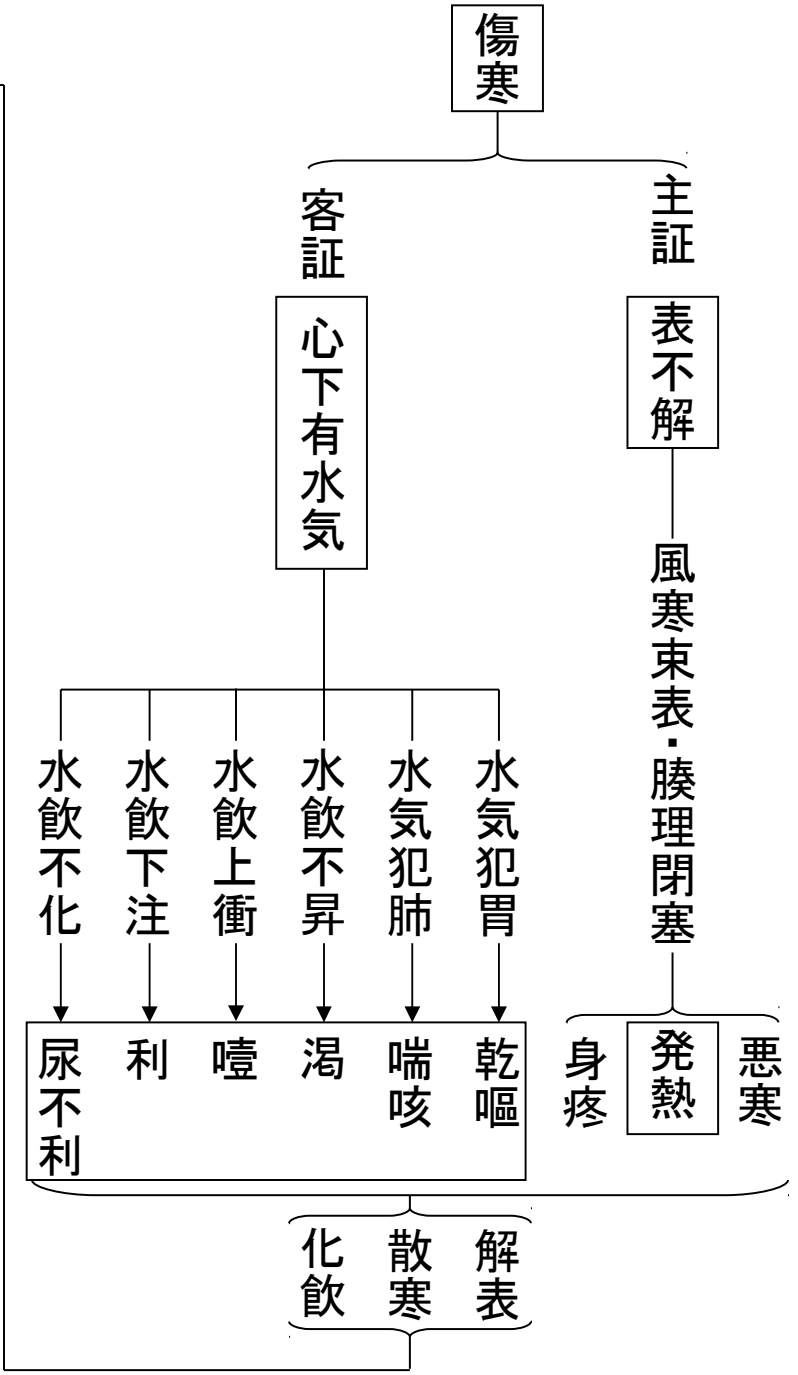


形八輕夕実八重

大青竜湯發之

第四十条 傷寒、表不解、心下有水氣、乾嘔、發熱而欬、或渴、或

利、或噎、或小便利、少腹滿、或喘者、小青竜湯主之。



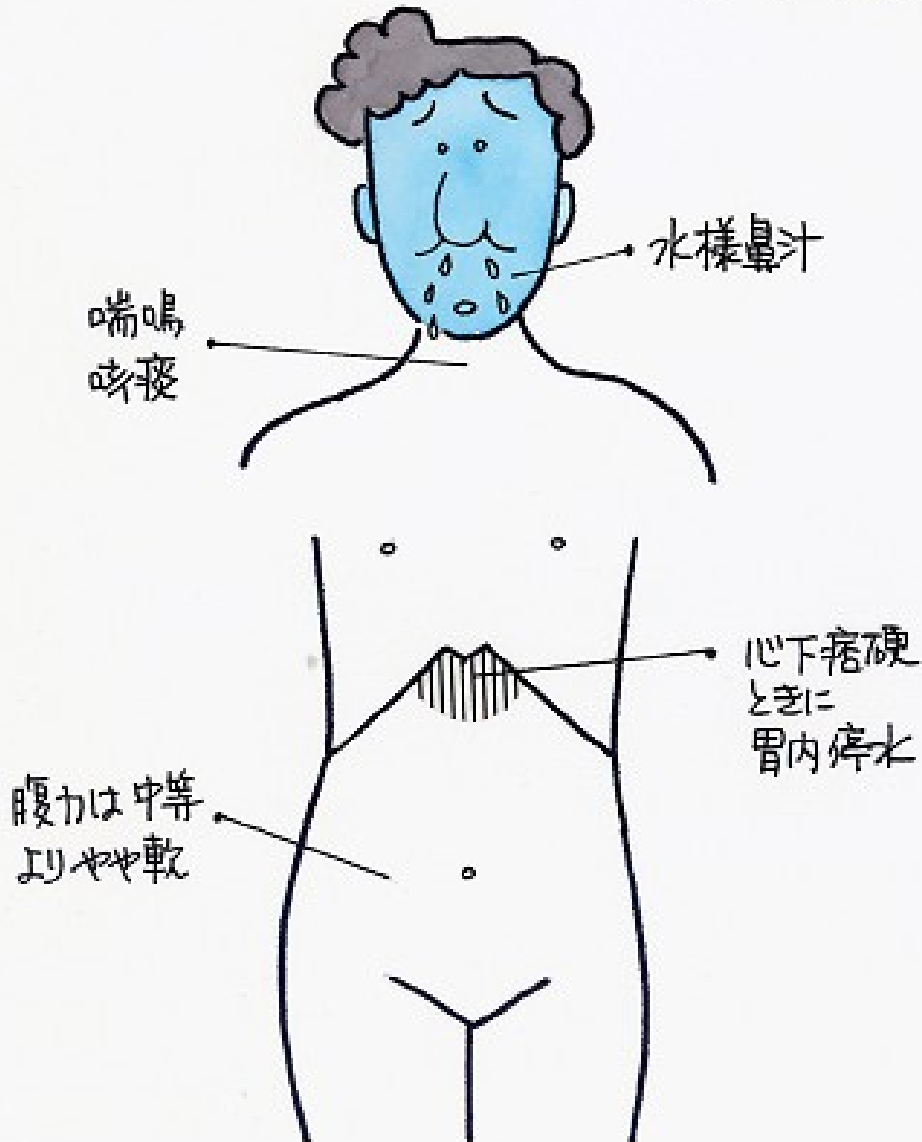
小青竜湯

麻黄湯去杏仁加・芍藥(榮衛調和)・半夏(降逆化飲)・乾姜細辛(温肺化痰)・五味子(斂肺止咳)

小青竜湯の証 *

方意

痰飲証に太陽傷寒を合併している者である。即ち水分過剰の体質で、でいつも胃や肺に水飲が溜まっている人が太陽傷寒に外感すると、傷寒の証候の他に痰飲が停滞するので、肺では喘咳、胃では嘔気、上焦では噎、腸では下痢、膀胱では尿不利や少腹満などといった多彩な客証が太陽傷寒証と共に現われる。

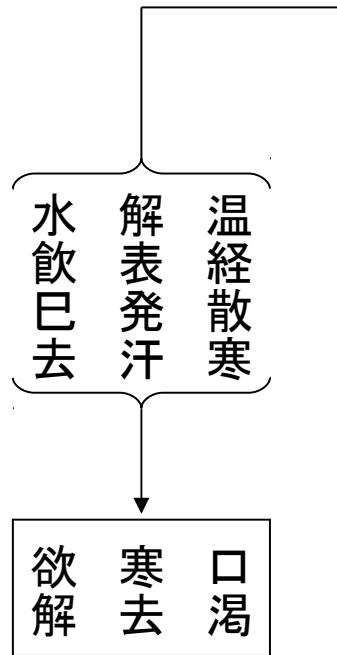
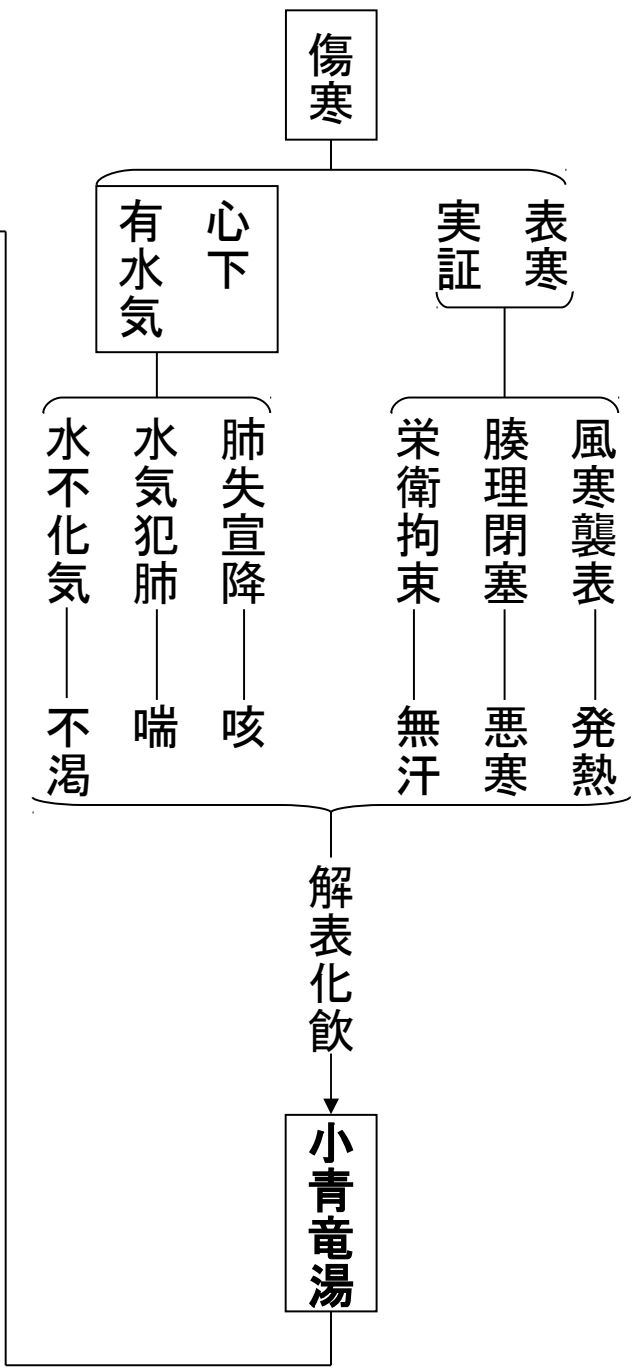


弁証のTrias

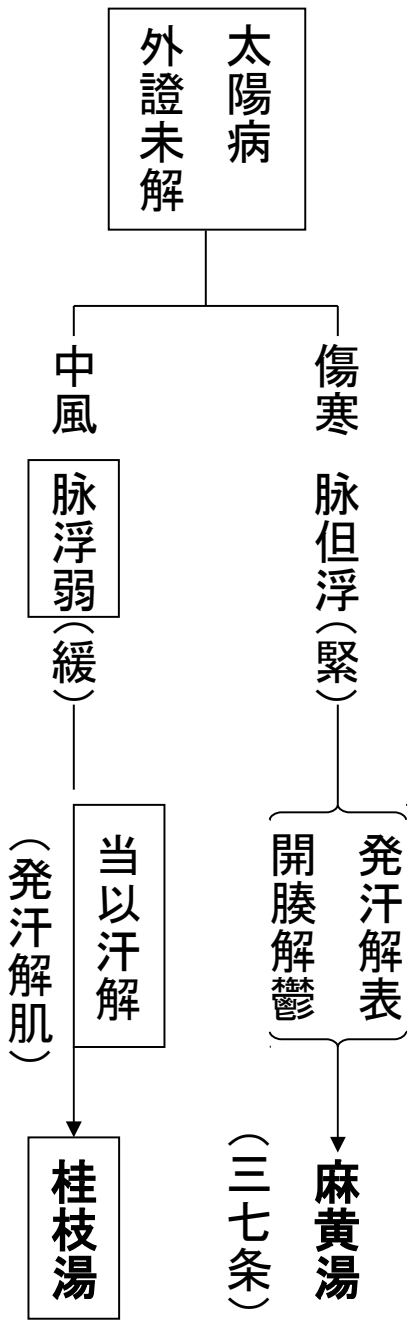
- 1) 発熱悪寒
- 2) 無汗、汗無し
- 3) 水様鼻汁、喘咳、胃内停水

第四十一条 傷寒、心下有水氣、欬而微喘、發熱不渴。服湯已、

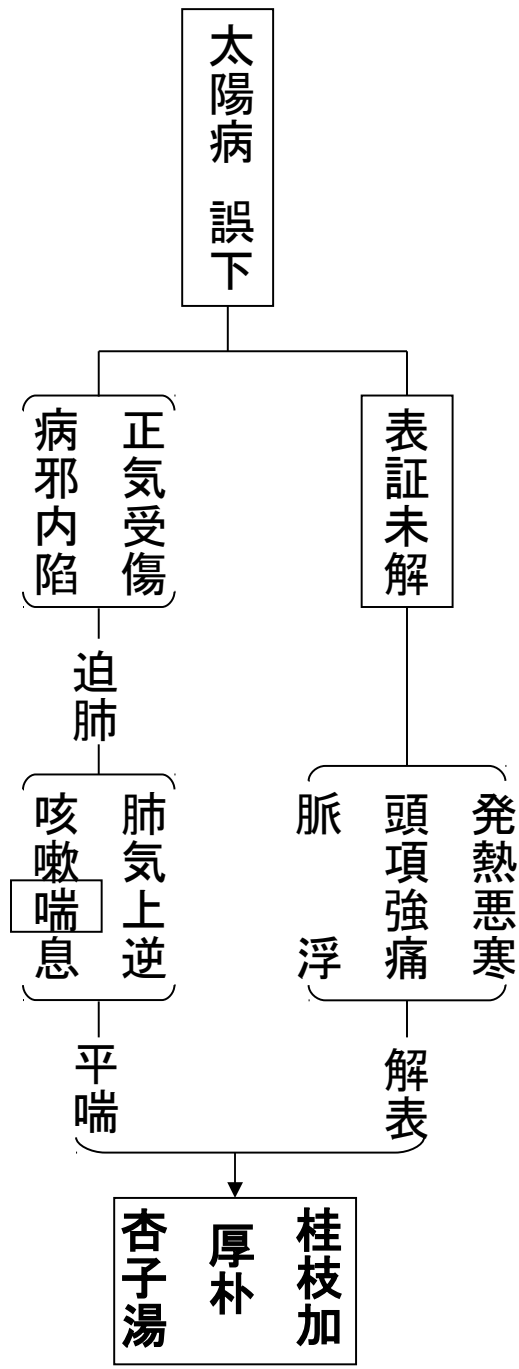
渴者、此寒去欲解也、小青竜湯主之。



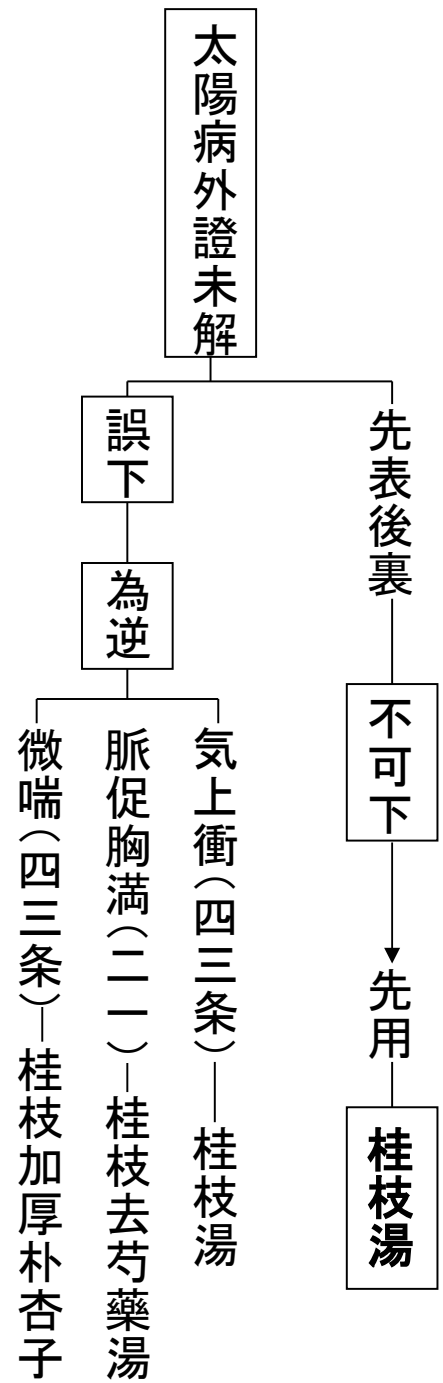
第四十二条 太陽病、外證未解、脉浮弱者、当以汗解、宜桂枝湯。



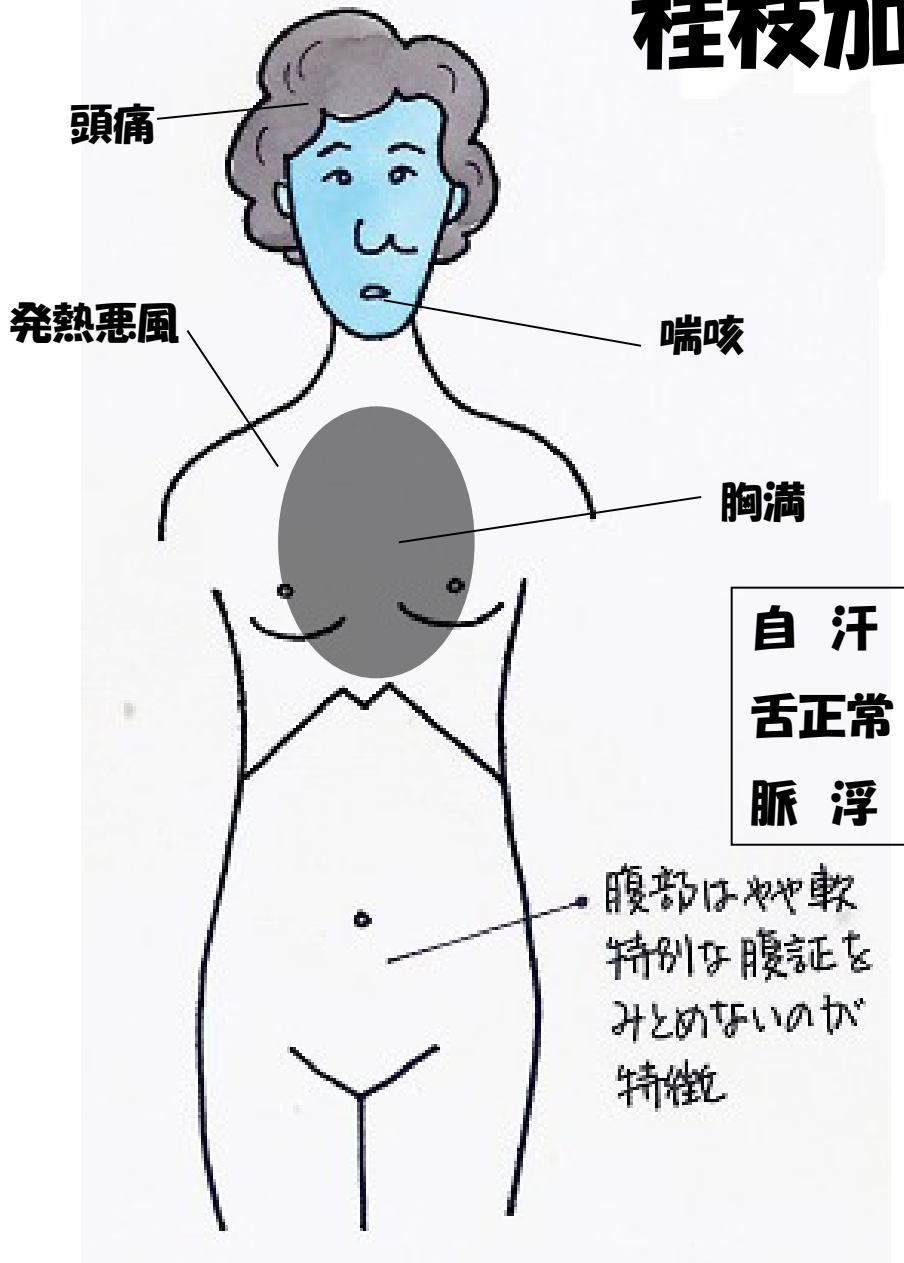
第四十三條 太陽病、下之微喘者、表未解故也。桂枝加厚朴杏子湯主之。



第四十四條 太陽病、外證未解、不可下也、下之為逆。欲解外宜桂枝湯。



桂枝加厚朴杏子湯の証



方解

太陽病を誤下した結果裏氣が虚し、表に残存する邪が裏の虚に乗じて内陷して肺に迫り、肺氣はその為上逆して、咳嗽や喘息が起こる。

処方は桂枝湯に厚朴と杏仁を加味、残存する表邪を解すと共に肺氣の上逆を降して喘咳を収める。

本方はまた喘息の持病のある人が太陽病にかかって喘咳する時用いる。

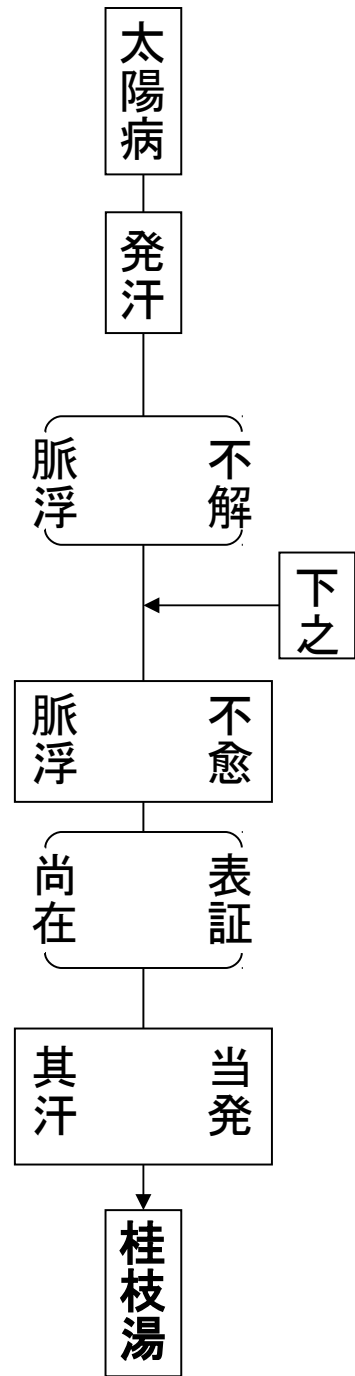
弁証のTrias

- 1) 太陽病中風証
- 2) 喘咳(持病の喘息出現)
- 3) 粘痰(肺熱)、胸痛は無い

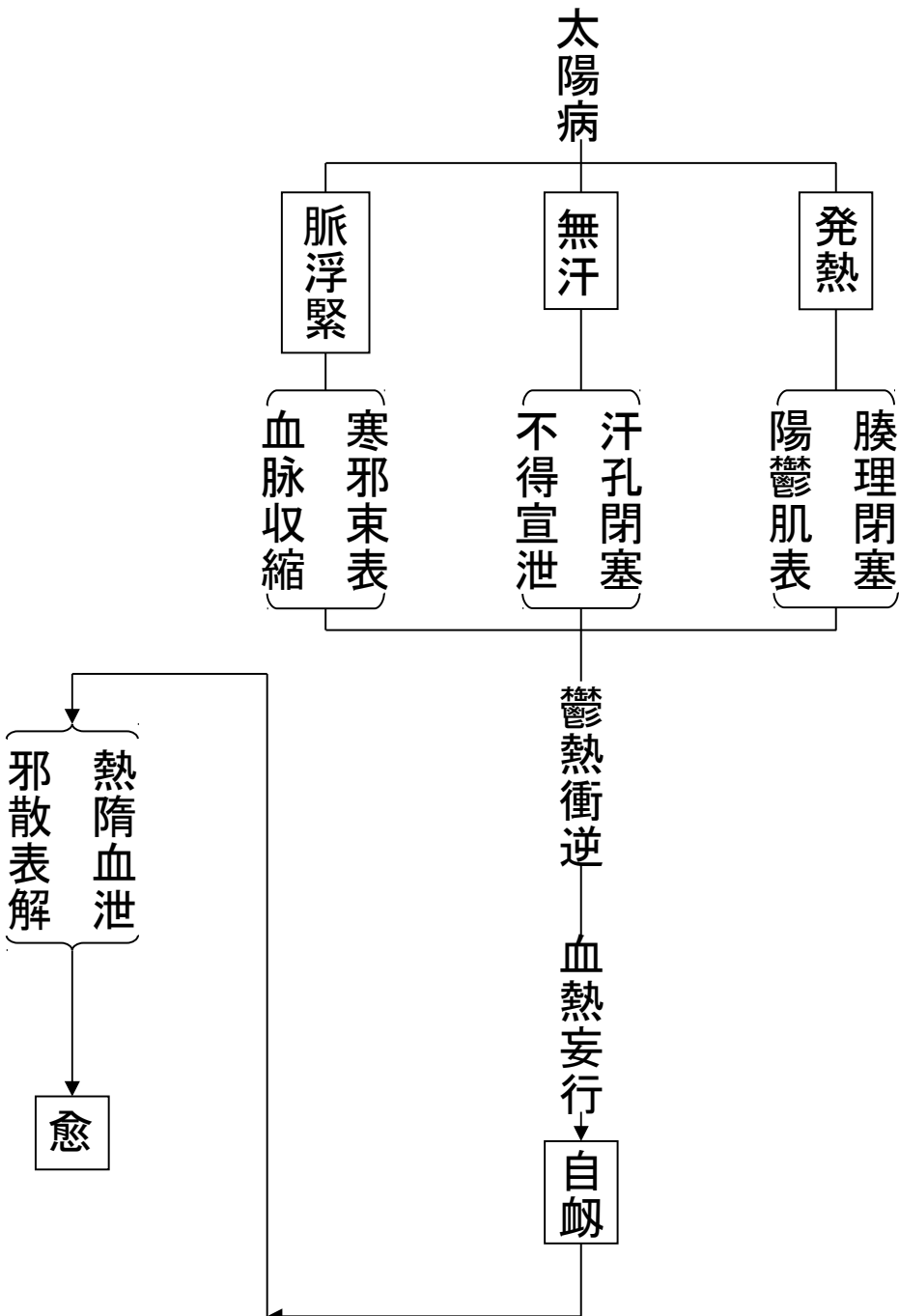
第四十五条 太陽病、先發汗不解、而復下之、脈浮者不愈。浮為

在外、而反下之、故令不愈。今脈浮、故在外、當須

解外則愈、宜桂枝湯。



第四十七条 太陽病、脈浮緊、發熱、身無汗、自衄者愈。

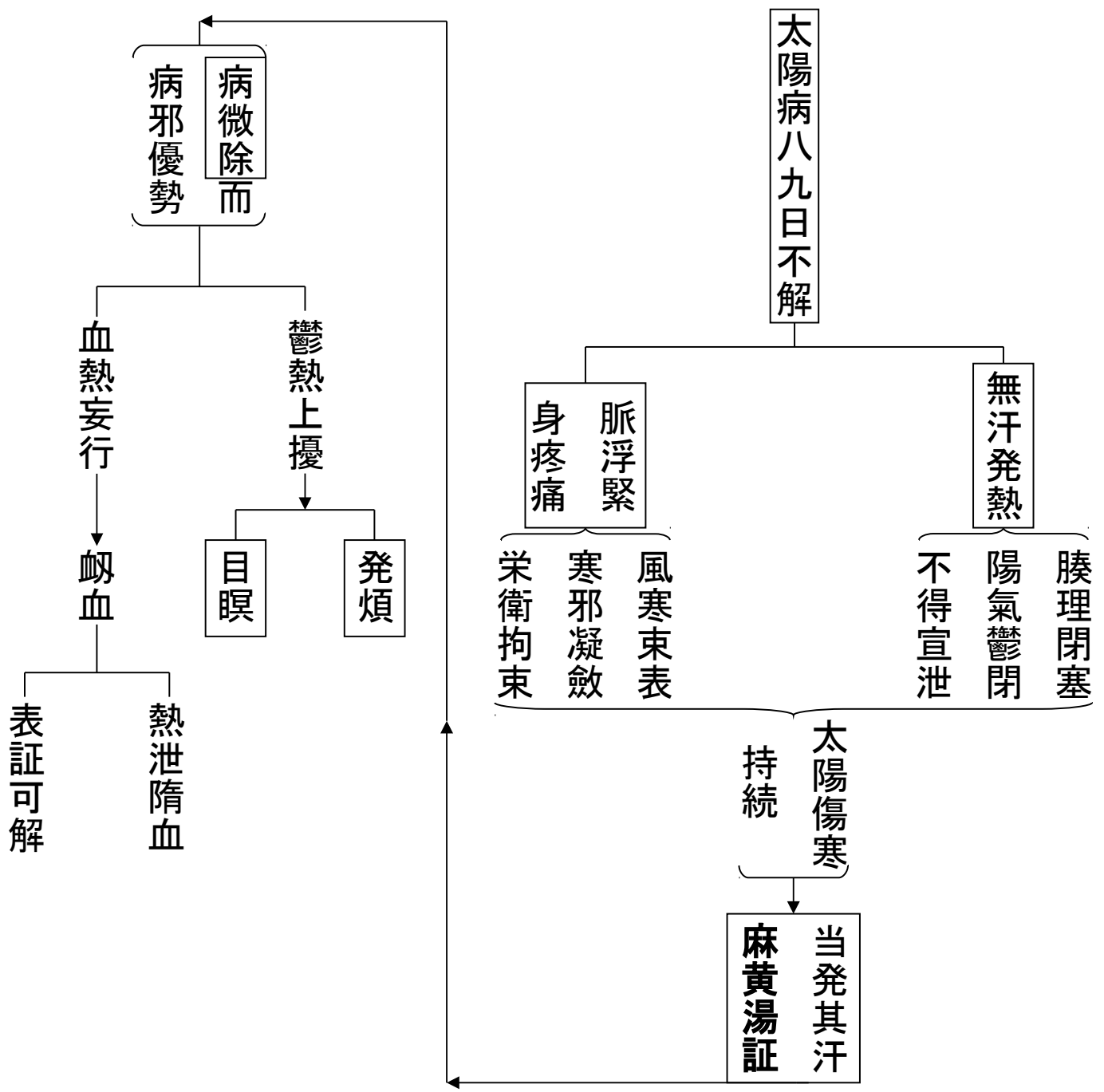


第四十六条 太陽病、脈浮緊、無汗、發熱、身疼痛、八九日不解、

表証仍在、此当發其汗。服藥已微除、其人發煩目瞑、

劇者必衄、衄乃解。所以然者、陽氣重故也。麻黃湯

主之。

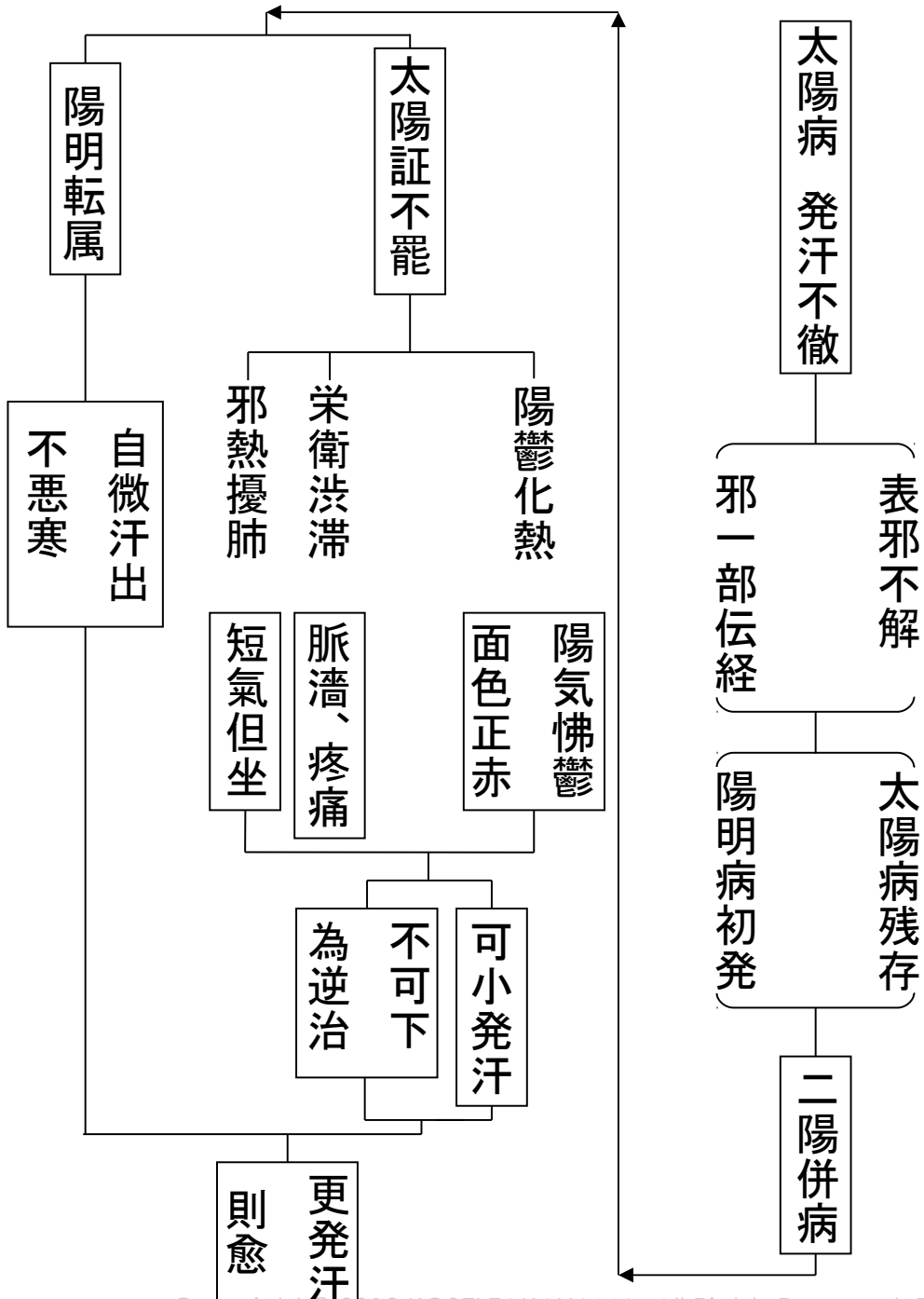


第四十八條 二陽併病、太陽初得病時、發其汗、汗先出不徹、因

轉屬陽明、續自微汗出、不惡寒。

若太陽病証不罷者、不可下、下之為逆。如此可小發汗。設面色緣緣正赤者、陽氣怫鬱不得在表、當解之薰之。

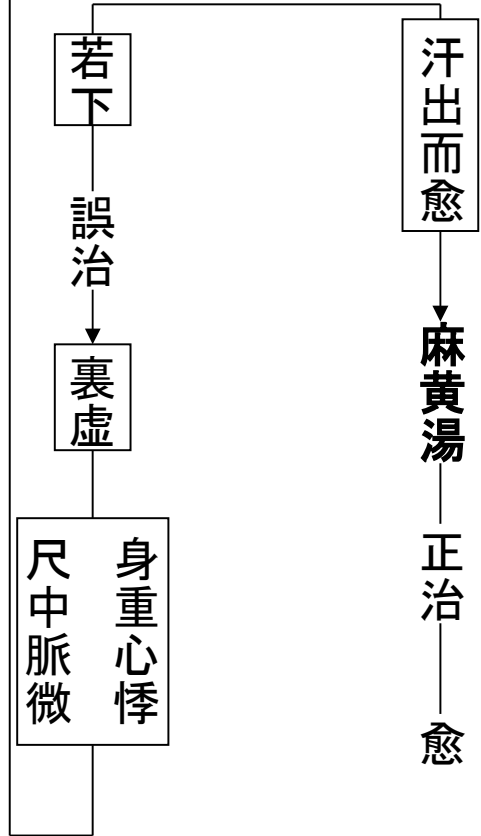
若發汗不徹、不足言、陽氣怫鬱不得越、當汗不汗、其人燥煩、不知痛處、乍在腹中、乍在四肢、按之不可得、其人短氣但坐、以汗出不徹故也。更發汗則愈。何以知汗出不徹、以脈濇故知也。



第四十九条 脈浮數者、法当汗出而愈。若下之、身重、心悸者、

不可發汗、当自汗出乃解。所以然者、尺中脈微、此裏虛。須表裏實、津液自和、便自汗出愈。

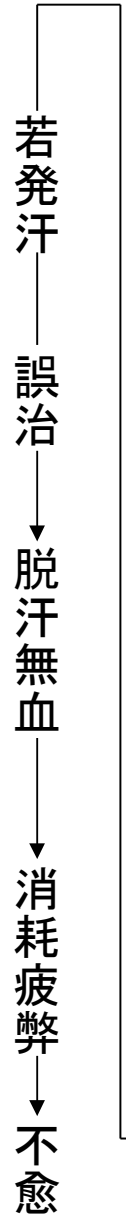
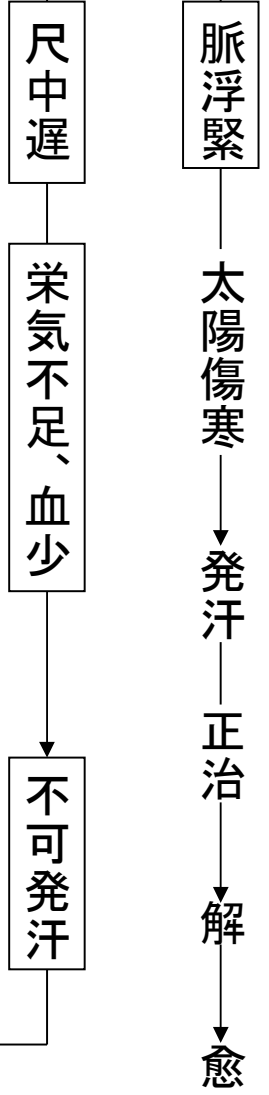
脈浮數
法当發汗
太陽傷寒



第五十条 脈浮緊者、法当身疼痛、宜以汗解之。假令尺中遲者、

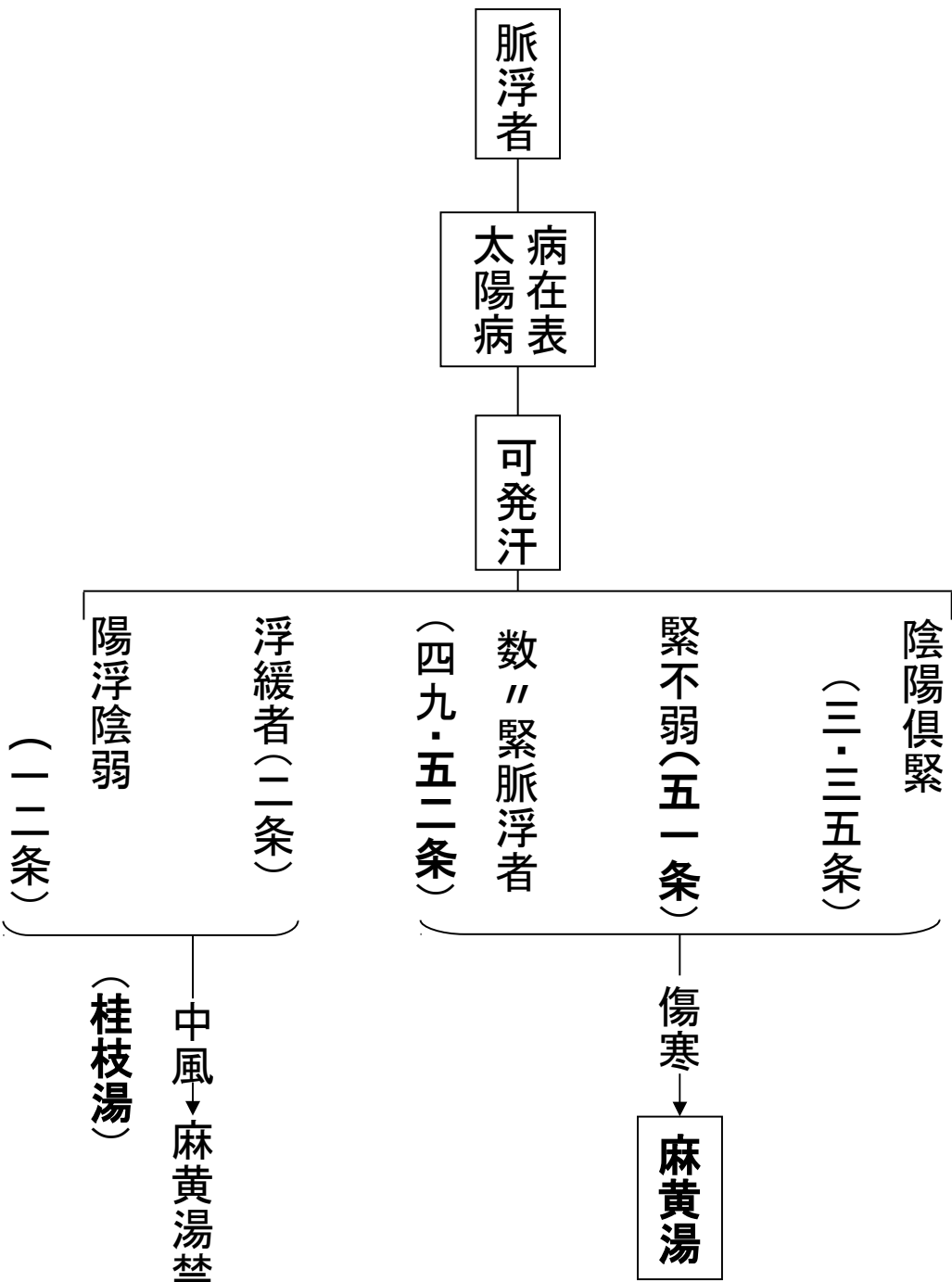
不可發汗。何以知然、以榮氣不足、血少故也。

身疼痛



第五十一条 脈浮者、病在表、可発汗、宜麻黄湯。

第五十二条 脈浮数者、可発汗、宜麻黄湯。



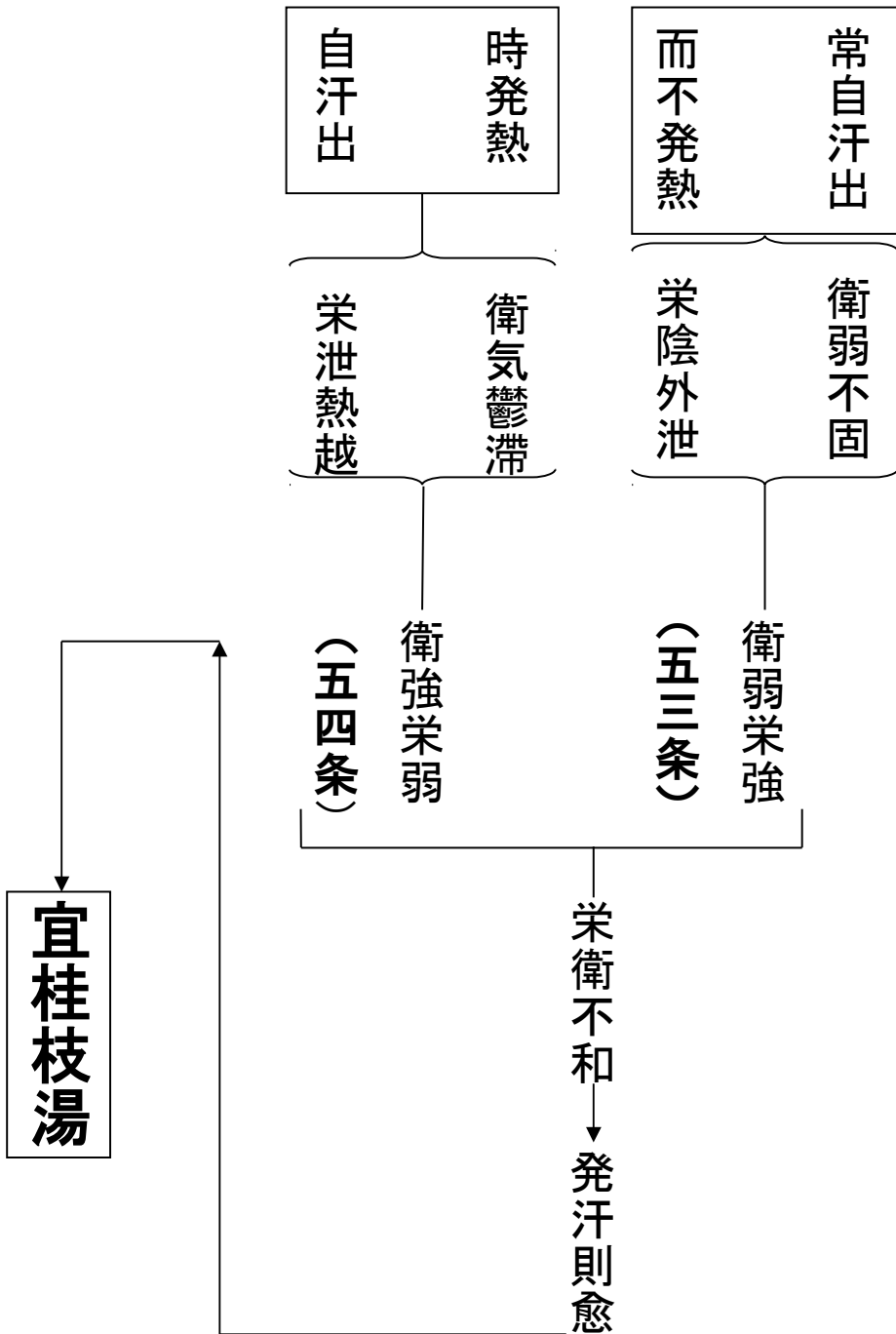
第五十三條 病常自汗出者、此為榮氣和、榮氣和者外不諧、以

衛氣不共榮氣諧和故爾。以榮行脈中、衛行脈外。

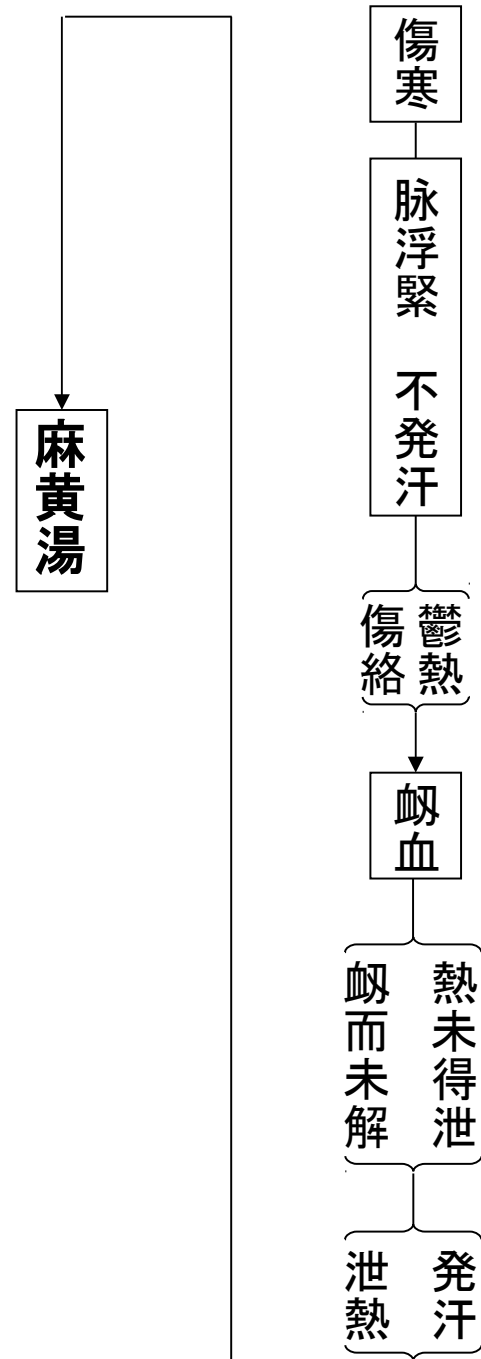
復發其汗、榮衛和則愈。宜桂枝湯。

第五十四條 病人臟無他病、時發熱、自汗出而不愈者、此衛氣

不和也。先其時發汗則愈、宜桂枝湯。

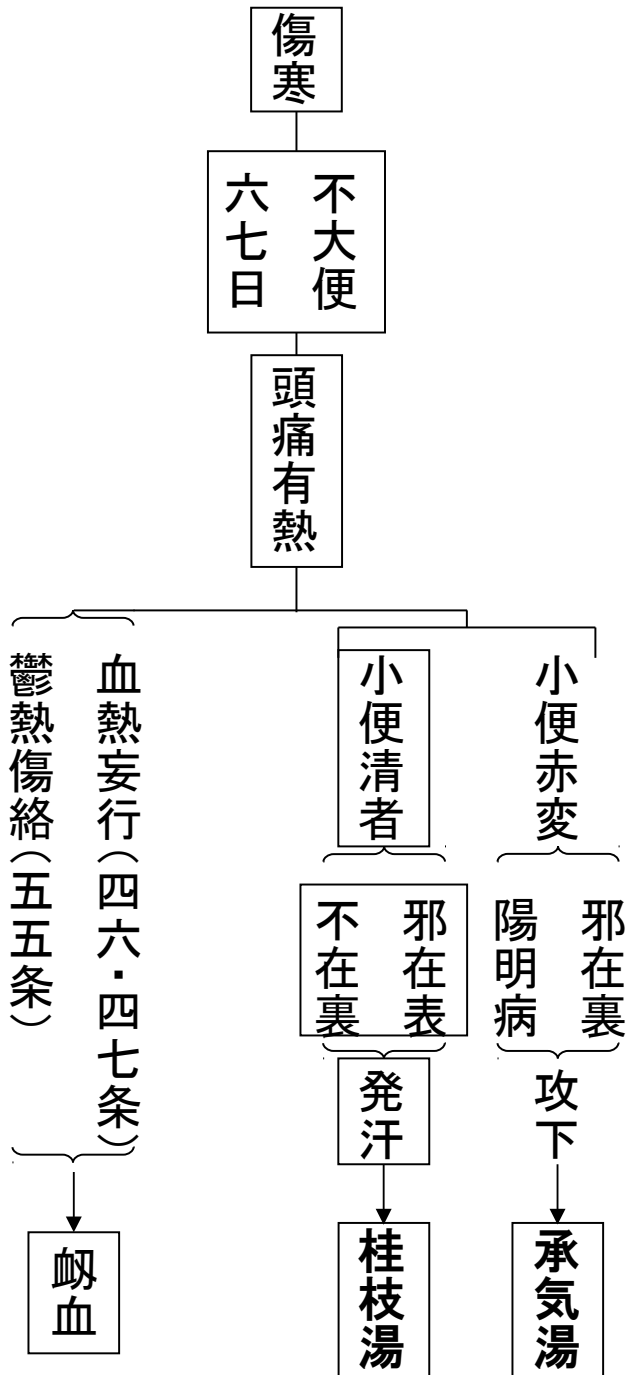


第五十五条 傷寒脉浮緊、不發汗、因致衄者、麻黃湯主之。

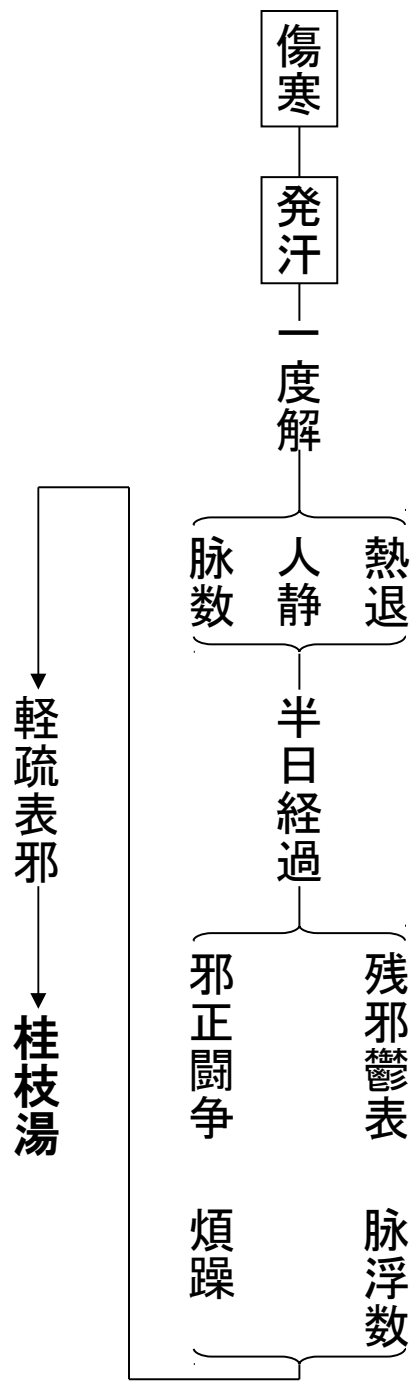


第五十六条 傷寒不大便六七日、頭痛有熱者、與承氣湯。

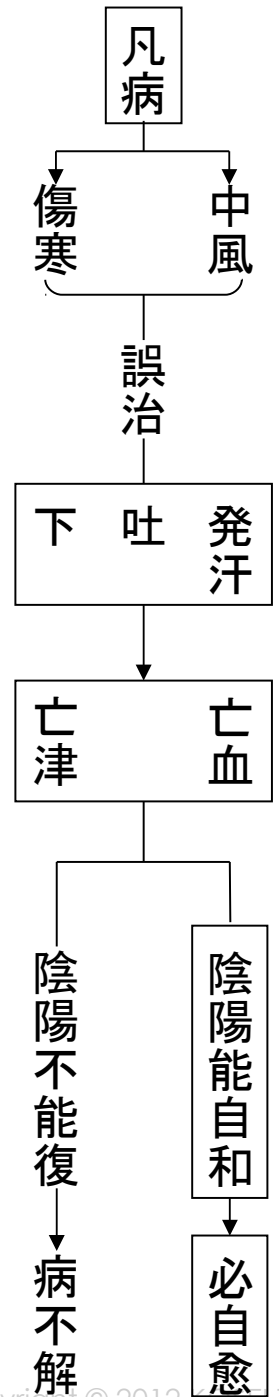
其小便清者、知不在裏、仍在表也、當須發汗。
若頭痛者必衄。宜桂枝湯。



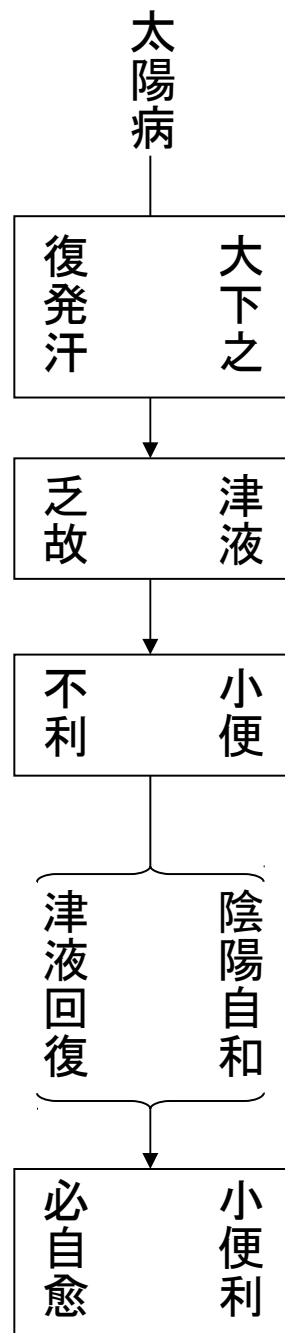
第五十七條 傷寒發汗已解、半日許復煩、脈浮數者、可更發汗、宜桂枝湯。



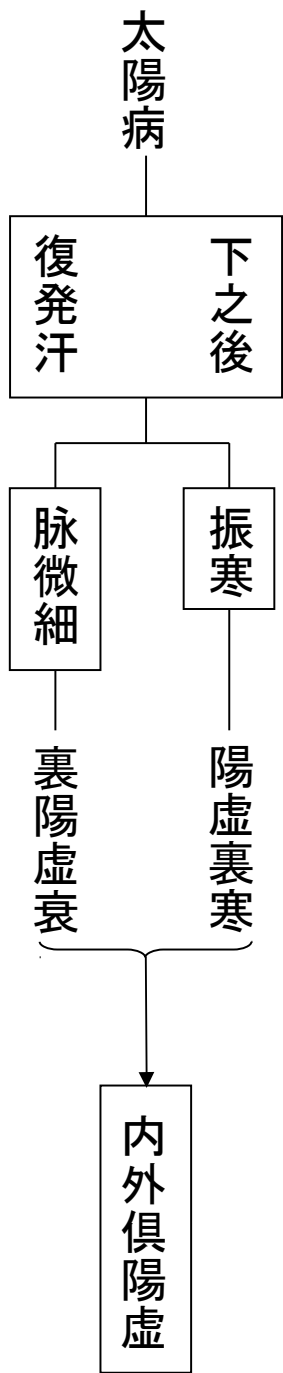
第五十八條 凡病、若發汗、若吐、若下、若亡血、亡津液、陰陽自和者必愈。



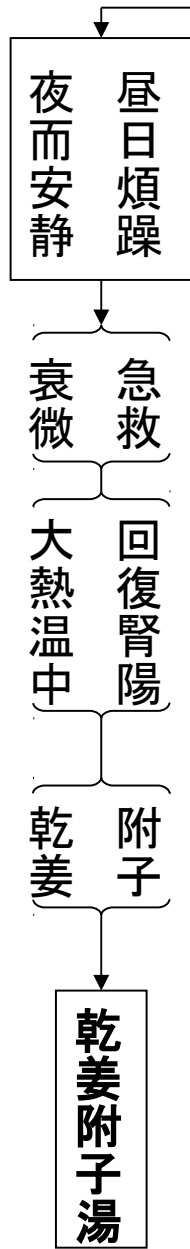
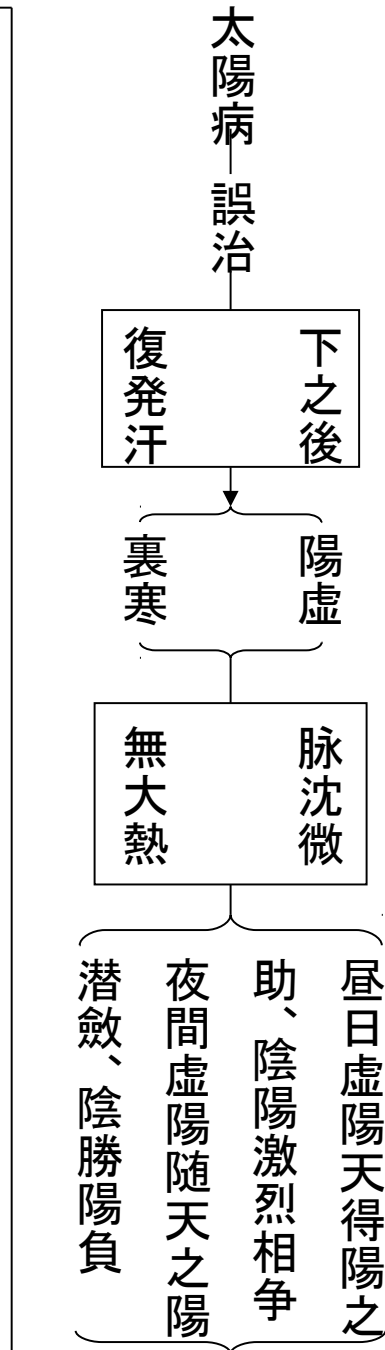
第五十九条 大下之後、復発汗、小便不利者、亡津液故也。勿治之、得小便利、必自愈。



第六十条 下之後、復発汗、必振寒、脉微細。所以然者、以内外俱虚故也。



第六一条 下之後、復発汗、昼日煩躁不得眠、夜而安静、不嘔、不渴、無表証、脉沈微、身無大熱者、乾姜附子湯主之。



乾姜附子湯の証

方意

太陽病の治療中に、先表後裏の治療原則を守らず、先に下してその後に発汗した為、発汗で表が虚し、瀉下で裏が虚して表裏の陽氣が俱に虚した。昼間は体内の乏しい陽氣に外界の陽氣が加勢して寒陰と激しく争う結果煩躁を生じ、夜は体内の乏しい陽氣では寒陰と争えないので病人は静かである。本方は乾姜と附子の2味で脾と腎の陽氣を急速に回復させる回陽急逆の峻剤である。



弁証のTrias

- 1) 熱無く、手足厥冷
- 2) 昼間のみ煩躁して不眠
- 3) 夜間は無症状